

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			研究科 異文化コミュニケーション	専攻 異文化コミュニケーション
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 5年		藪並 郁子 印		
指導教員	所属・職名		氏名		
	社会学部/独立研究科 異文化コミュニケーション		阿部 治 印		
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ ○社会		個人・共同の別	○個人 ・ 共同 名	
研究課題名	日本における環境教育・ESD（持続可能な開発のための教育）に関する評価研究				
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	立教大学異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻・5年		藪並郁子		
研究期間	2011 年度				
研究経費	200 千円				

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

環境教育分野では、環境教育実践に関する理論研究が多く行われてきた。これらの研究で、環境教育が環境保護への意識を向上させることなどに有効であることが示されている。また、近年、ESD（持続可能な開発のための教育）研究が進み、ESDが持続可能な社会を実現するために重要であるとの認識が浸透しつつある。環境教育やESDが、環境保全や持続可能な社会の実現のためにどのような効果をどれだけ与えることができるのかをアカウンタビリティの観点からも客観的に示すことが求められている。環境教育やESDの効果をわかりやすく且つ客観的に評価する手法の確立の必要性が認められている。そこで、評価研究分野での知見、特にロジック・モデル理論を環境教育・ESD分野に導入・応用することが有効であると考え、その方法論を確立する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[環境教育] [ESD (持続可能な開発のための教育)] [ロジック・モデル]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

2011 年度の研究については、ほぼ研究計画通り進行した。以下に研究成果として、本年度執筆した論文の概要を記す。

日本の環境教育における評価の現状と課題**Review and Analyze an Evaluation of Environmental Education program in Japan****1. はじめに**

日本での環境教育は、1960 年代に始まった公害教育や自然保護教育の経験を基に 1970 年代には体系的に発展し、1980 年代に定着したとされている (鈴木, 1996; 藤岡, 2004; Kozawa, 2006)。2005 年には「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」が開始され、「持続可能な開発のための教育」(Education for Sustainable Development: ESD) の試みが成されてきている。このように環境教育の概念と実践が発展し ESD へと向かう中、環境教育の教育効果とは何であるのかを明らかにするための評価の仕組みを確立させることが重要であろう。これまでに多くの環境教育の実践が報告されているが、環境教育の教育効果を体系的に評価したものは少ない。特に環境教育における評価を正面から捉えた研究はほとんどない(野村・高橋, 2001)。

そこで、本研究では、日本の環境教育実践において実践者はどのような教育目標を設定したのか、実践によりどのような教育効果が得られたのか、さらに実践者はどのような評価を行なったのかを解析し、日本の環境教育における評価の現状を明らかにし、今後の課題を検討する。

2. 研究方法**(1) 文献の解析**

日本環境教育学会が発行する学会誌『環境教育』(創刊号 1991 年～2010 年号) に掲載されている全ての文献(論文・報告・資料)を対象に、広い意味での評価や振り返り、教育評価の記述を含む文献を選択し、文章解析を行なった。文章解析より、環境教育の評価目的、評価主体、評価対象、評価方法、評価指標(効果)を抽出し、その傾向を調べた。なお、『環境教育』の掲載文献を対象にした理由は、最新の環境教育の理論的研究や優れた実践に関する研究が多く掲載されているからである(例えば、湊, 1992; 今村, 1998; 佐古・平田・ギルフォード; 2002, 中山, 2004; 小玉, 2009; 荻原・福山・永田・宮岡, 2010; 阿部, 2010; 甲野, 2010 など)。

(2) 教育評価プロセスの再構築

(1) で抽出・分類した文献の中から、さらに教育の目的、評価のプロセス、成果(効果)が明確に記述されている文献を厳選し、ロジック・モデルを用いて教育実践を評価プロセスとして再構築し、教育の成果(効果)を分類化する。

(3) 教育目標と成果の整合性の評価

環境教育の成果(効果)を明らかにするために、評価プロセスの中でも、特に教育目標と成果(効果)の整合性に注目して考察する。

3. 解析の理論

本研究では、教育実践を目的達成のための個別のプロジェクトと見なして、評価研究分野や開発援助分野で発展してきたプロジェクト評価で使用されるロジック・モデルを用いて解析を行った。ロジック・モデルは、プロジェクトの進行を「投入」「活動」「結果」「成果」の要素に区分し、各要素の構成と相互関係(因果関係)を図化したものである。ロジック・モデルはプロジェクトのセオリーを明確化する役割を担っているが、「セオリーの不明確さがあだとなって最終的に失敗したプログラムは少なくない」(佐々木, 2003, p.28)ことが指摘され、ロジック・モデルを用いる有効性が強調されている。

本研究では、すでに終了した環境教育実践についてロジック・モデルの考え方を適用して、投入から成果までの各要素を文章より再構成し、環境教育プログラムの成果(効果)や評価指標を抽出した。終了済みの環境教育プログラムにロジック・モデルを適用し、

研究成果の概要 つづき

環境教育プログラムの解析を試みた研究として Marcinkowski (2004) がある。

4. 結果

(1) 環境教育研究における評価の傾向

調査対象とした文献のうち、評価に関連した記載、評価またはふりかえりという用語が使用されている文献 97 について分析を行った。以下の項目を抽出し、分析をした。1) 評価目的、2) 評価主体、3) 評価対象、4) 評価手法、5) 評価指標

(2) ロジック・モデルによる評価の構造解析

環境教育プログラムにおいてどのような評価がなされているのか、その傾向についてみてきた。この結果を踏まえ、評価の詳細を明らかにするために、ロジック・モデルを用いた解析を行なった。環境教育プログラムの実践事例の記述に基づきロジック・モデルを作成し、個々のプログラムを解析した。ロジック・モデルの構成要素である投入、活動、結果、成果を明確に視覚化することで、環境教育プログラムの評価の現状と課題を明らかにした。

5. 考察と結論

第 1 に、日本の環境教育学における評価の枠組が確立していない。野村・高橋 (2001) によって、トビリシ宣言で示された「目的カテゴリー」を「認知面 (Cognitive)」と「行動面 (Behavioral)」の 2 つの視点に基づいた 2 分法による評価が提案されている。これは、ロジック・モデルに当てはめると成果の部分の「短期の成果」と「長期の成果」に類似する概念である。「行動面」の評価が環境教育の評価の課題として挙げられてきたが、ロジック・モデルによる「長期の成果」を明確にすることで、「行動面」の評価が可能となるであろう。第 2 に、環境教育プログラムの成果を評価する時期あるいは期間である。ほとんどの環境教育プログラムは、そのプログラムの教育効果をプログラム終了直後に測定している。確かに、プログラム終了直後では、プログラム以外の要因 (外部要因) が入り込まないため、より正確にそのプログラムの効果を測定できるというメリットがある。しかし、多くの環境教育プログラムは、短期間だけの認識や行動の変化を期待して行なわれているのではなく、より長期的な効果、あるいは短期の効果が継続することにより長期の成果へと結びつくことで初めてプログラムの目的が達成されるのである。個々の環境教育プログラムが、短期的ではあるが教育効果があることは、これまでに蓄積された環境教育プログラムの知見から明らかである。この短期的な教育効果と長期の成果 (最終目的) の間の因果関係を見極めることで、短期の成果から長期の成果を評価できる可能性があるだろう。その際、成果を多面的に測定するより詳細な評価指標の設定が課題となる。第 3 に、本論文ではロジック・モデルを用いて環境教育プログラムの評価を解析した。ロジック・モデルを用いることで、プログラムの全体像が視覚化され、誰にでもわかりやすくなったことによりプログラムに対する共通認識の醸造を容易にし、評価指標を明確に示すことでプログラムの評価が行いやすくなるであろう。ロジック・モデルを環境教育プログラムの評価に積極的に取り入れる仕組みづくりが今後の課題である。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- 日本環境教育学会 青森大会 (2011年7月16日)、口頭発表「日本における環境教育・ESDに関する評価研究」